

チーム学校に向けた現代的課題 (3) —生徒指導的観点から—

片山 紀子・角田 豊・小松 貴弘

The Current Issues of “School as a Team” (3)
—From the Perspective of Student Guidance—

Noriko KATAYAMA, Yutaka KAKUTA, Takahiro KOMATSU

Accepted December 7, 2018

抄録：若手教員は経験のある教員に比べて、生活のあり方全体が「貧困化」しているのではないかと、そしてそのことが「チームとしての学校」を阻害しているのではないかと仮説を立て、小中学校の教員に対してアンケート調査を行なった。しかし、予想とは異なり、一部を除いて仮説を裏付ける結果は得られなかった。結果は、むしろ若手教員の方が相対的に現在の仕事と生活に満足感を抱いており、若手教員は何ら困り感を感じていなかった。これについて、アンケート調査による限界を認めた上で、若手教員と経験のある教員の間にある認識の違いは、両者の間にある「感受性そのものの違い」に起因するのではないかと推考し、再度仮説を立てるに至った。この「感受性そのものの違い」が、「チームとしての学校」の阻害要因となっている可能性があり、これまで見逃されてきた視点だといえる。

索引語：チーム学校，生徒指導，若年教員，経験のある教員，現代的課題

Abstract: This article starts with the hypothesis that the concept of “school as a team” in Japan is indirectly affected by the lower quality of younger teachers’ overall lives compared to that of more experienced teachers. Under these circumstances, an investigation by questionnaire survey was administered to teachers working in Japanese elementary and junior high schools. The results, however, mostly disproved the hypothesis, with the exception of a few cases. More importantly, it showed that younger teachers are relatively satisfied with their current situations, without any concerns. This suggests limitations of the survey and also brought up a new hypothesis: Are the different perceptions between young and experienced teachers attributed to “differences in sensitivity”? This sensitivity age gap could be the major hindrance in terms of “school as a team,” and it can be a new perspective to address these issues.

Key Words: school as a team, student guidance, young teachers, experienced teachers, current task

1. 問題の所在

2015年12月21日、中央教育審議会答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」が出され、学校は今、周りの専門家と一体になって、教育活動に取り組むことが求められている。これを受けて、京都教育大学大学院連合教職実践研究科生徒指導力高度化コースに所属する筆者らは、学校のチーム化に、生徒指導的視座からどのような課題があるのかについて、教員及び保護者を対象としたアンケート調査を行い、これまで検証を行ってきた。

その結果、教員の経験年数によって生徒指導をめぐる意識に違いがあることを、研究成果の一つとして提示することができた（片山・角田・小松，2017）。すなわち、教職5年未満の教員とそれ以上の経験をもつ教員との間で、児童生徒理解や保護者理解など、生徒指導にかかる認識に大きなズレがあることを見出したのである。

具体的には、5年未満の教員は、経験5年以上の教員に比べ、保護者が子どもに無関心であるとは思っておらず、虐待を行う保護者がいるともあまり思っていなかった。また、保護者に対して、保護者が忙しく余裕がないという認識も経験5年以上の教員ほどは持っておらず、5年未満の教員は5年以上の教員と比べ、保護者に対して漠然と肯定的なイメージを持っていた。学校の決まりに対する理解の程度も、5年未満の教員はそれ以上の経験がある教員に比べて相対的に低かった。さらには、子どもに対する自信が低く、子どものことをわかっているともあまり思っていなかった。つまり、5年未満の教員は、5年以上の教員と比べて、統計上有意に生徒指導上の問題が見えていなかったのである。こうした結果は、初心者ゆえの当然の結果ともいえようが、経験のある教員と若手教員の感じ方に、思いのほか大きな落差があったことになる。

筆者らは、スクール・カウンセラーやいじめ第三者調査委員といった立場で学校とかかわる機会が多い。そのため、子どもの不登校やいじめ等、学校場でさまざまな生徒指導上の問題が生じているのを目の当たりにする。そしてそのたびに、それらの問題が教職員のチーム化の脆弱さによって生じている現実直面する。

そもそも「チームとしての学校」の趣旨は、学校の外部たとえば心理や福祉の専門スタッフと連携・分担し、複雑化・多様化した課題を解決するよう、必要な指導体制を整備することである。しかしながら、筆者らはこれまでの経験等を通して、不登校やいじめといった諸問題の解決には、外部の専門家と連携する以前に、学校の中にいる教職員のチーム化が、とりわけ重要であるという認識を強く持つようになった。

近年、よく知られるように若手教員の比率が急激に増して、教員の年齢構成がアンバランスな状態になっている。先の調査結果から、若手教員の意識が経験のある教員とは異なっていることが明らかとなったわけであるが、われわれはその意識の差が、若手教員と経験のある教員との間にある、生活意識と生活様態、および成長期の経験の差にあるのではないかという仮説を立てた。もう少し突っ込んで言えば、若手教員は経験のある教員に比べて、生活のあり方全体が「貧困化」しているのではないかと推論し、さらにはその差が「チームとしての学校」を阻害しているのではないかと考えるに至った。

そうした仮説のもと、本稿では新たに関西地区の小中学校教員約500名を対象に、教員の生活調査を中心にしたアンケート調査を行った。調査データをもとに、若手教員と経験のある教員の間にある認識の違いとなるものが一体いかなるものであるのか、その正体を解明したい。そのことが、「チームとしての学校」に向けた示唆にもなり得るのではないかと考える。

問 1 性別 問 2 年齢 問 3 居住地域 問 4 家族構成

問 5 平日（仕事のある日）の起床時間 問 6 平日の退勤時間 問 7 平日の就寝時間

問 8 平日に家に持ち帰って仕事をする時間 問 9 休日に家に持ち帰って仕事をする時間

問 10 平日に ①家でテレビ（録画等含む）を見る時間
②家でパソコンを使う時間
③家でスマートフォン（携帯電話）を使う時間
④家族と話をする時間（電話で話す時間を含む）

問 11 普段の生活の頻度
①決まった時間にきちんと食事をする ②食事の時間を楽しいと思う
③料理をする ④掃除や洗濯をする
⑤読書をする（マンガや雑誌を除く）
⑥資格取得やお稽古事など職務以外に能力を高めるための勉強をする
⑦趣味やスポーツを楽しむ ⑧友達と会う
⑨おしゃれや趣味のために買い物に出かける ⑩ボランティア活動をする

問 12 ①友達との関係に満足している
②自分の親との関係に満足している
③パートナーとの関係に満足している

問 13 普段どの程度できているか
①自分の考えをわかりやすく説明する ②自分の感情を上手にコントロールする
③自分から率先して行動する ④人と協力しながら仕事を進める
⑤疑問を納得するまで追求する ⑥筋道を立てて論理的にものを考える
⑦人が思いつかないアイデアを出す ⑧人前で上手に発表する
⑨リーダーシップを発揮する ⑩見通しを立てて計画的に仕事を進める
⑪自分の適性や能力を把握する ⑫将来の目標をもって仕事をする
⑬与えられた仕事を着実にこなす

問 14 普段仕事をしていてどの程度感じるか
①仕事が楽しい ②仕事をやめたい

- | | |
|---------------------|-----------------|
| ③仕事を通じて自分の能力が高まっている | ④給料や待遇に満足している |
| ⑤仕事にやりがいを感じる | ⑥職場の上司や先輩は尊敬できる |
| ⑦自分の個性や能力に合った仕事だと思う | ⑧職場の人間関係がわずらわしい |
| ⑨仕事量が多くて大変だ | |

問 15 小・中学生の頃にどれくらいしたか

- | | |
|-----------------------|------------------|
| ①読書（マンガや雑誌を除く） | ②親と将来のことについて話をする |
| ③家事の手伝い | ④家で勉強する |
| ⑤受験のために熱心に勉強する | ⑥自然の中で遊ぶ |
| ⑦大勢の友達と外で遊ぶ | ⑧親や学校の先生以外の大人と話す |
| ⑨地域の行事に参加する（祭や子ども会など） | ⑩部活動に熱心に取り組む |
| ⑪テレビゲームをする | ⑫親や大人に反抗する |

問 16 小・中学生の頃の家庭の経済的な暮らし向きの程度

(2) 手続き

調査は、2018 年 1 月～2018 年 2 月にかけて、関西圏にある中規模都市の公立小学校 9 校と中学校 6 校の教員を対象に行った。性別（男 219 名、女 283 名）と校種別（小学校 300 名、中学校 204 名）の分析は別の機会に行い、本研究においては年代別の差に焦点を当てる。以下に年代別の教員数を示す。20 代は 122 名、30 代は 119 名、40 代は 94 名、50 代以上（以下 50 代と表す）は 163 名、システム欠損値は 6 名で被験者の総計 504 名である。

3. 調査結果

(a) 問 3 より、本調査の対象は中核都市にある学校であり、都市郊外あるいは中心部の住宅地域に住む教員が大半の 452 名（89.7%）であった。問 4 より、独居者は 69 名（13.7%）で、年代としては若い世代が多く、20 代と 30 代を合わせると 51 名（73.9%）であった。

(b) 問 5～7 より、起床、退勤、就寝の各時間の全体の最頻値を見ると、起床時間は午前 6 時が最も多く、退勤時間は 19 時、就寝時間は 24 時が最も多かった。年代差は 50 代 > 40 代 > 30 代 > 20 代の順に起床時間が有意に早かった ($p < .01$)。

(c) 問 8 と 9 より、仕事の持ち帰り時間を見ると、世代間では平日のみ 40 代 > 30 代 > 50 代・20 代の順に持ち帰り仕事時間が長い傾向が見られた (Kruskal-Wallis 検定 $p < .10$)。

(d) 問 10 では表 2～4 のように、③スマホの使用時間では 20 代 > 30 代 > 40 代 > 50 代の順に長く、④家族会話は 50 代が他に比べて短いことが示された。

(e) 問 11 の①～⑩の統計値を表 5 に、一元配置分散分析結果を表 6 に示す。有意差が見られた項目は、Duncan の多範囲検定 ($p < .05$) を行った。①決まった食事時間、⑥お稽古や職務以外の勉強、⑩ボランティア活動に年代差は見られなかった。②食事が楽しいのは 30・20 代 > 50 代、③料理をするのは 50・40 代 > 20・30 代、④掃除・洗濯をするのは 50・40 代 > 20 代、⑤読書をするのは 50 > 40・30・20 代、⑦趣味やスポーツを楽しむのは 20 代 > 30 代 > 40 代、⑧友達と会うのは 20 代 > 30 代 >

表 2 問 10 の各項目の統計値

	度数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
①	502	2.10	.896	1	4
②	501	1.52	.778	1	4
③	503	1.71	.848	1	4
④	501	1.96	.872	1	4
年代20304050代	498	2.5984	1.17800	1.00	4.00

表 3 問 10 各項目における年代の順位

	年代20304050代	度数	平均ランク
①	20代	122	258.04
	30代	118	253.26
	40代	94	219.97
	50代	163	255.89
	合計	497	
②	20代	122	230.66
	30代	117	245.79
	40代	93	245.19
	50代	163	264.17
	合計	495	
③	20代	122	349.58
	30代	119	279.69
	40代	93	209.04
	50代	163	174.11
	合計	497	
④	20代	122	254.27
	30代	119	266.84
	40代	92	261.12
	50代	163	223.67
	合計	496	

表 4 問 10 ①～④の検定結果検定結果^{a, b}

	①	②	③	④
カイ 2 乗	5.324	5.341	139.282	8.768
自由度	3	3	3	3
漸近有意確率	.150	.148	.000	.033

a. Kruskal Wallis 検定

b. グループ化変数: 年代20304050代

50代、⑨おしゃれや買い物するのは20代>30代>40・50代であることが示された。現実生活中心の40・50代に比べて、20代は楽しみ重視の生活といえる。

表5 問11の各項目の統計値

		度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の95%信頼区間	
						下限	上限
①	20代	122	1.86	.846	.077	1.71	2.01
	30代	119	1.78	.865	.079	1.62	1.94
	40代	94	1.93	.895	.092	1.74	2.11
	50代	163	1.80	.862	.068	1.66	1.93
	合計	498	1.83	.864	.039	1.76	1.91
②	20代	122	1.53	.855	.077	1.38	1.69
	30代	119	1.50	1.096	.100	1.30	1.69
	40代	94	1.69	.892	.092	1.51	1.87
	50代	161	1.80	.789	.062	1.68	1.92
	合計	496	1.64	.912	.041	1.56	1.72
③	20代	122	2.40	1.126	.102	2.20	2.60
	30代	119	2.42	1.161	.106	2.21	2.63
	40代	93	2.06	1.071	.111	1.84	2.29
	50代	163	2.01	1.097	.086	1.84	2.18
	合計	497	2.21	1.128	.051	2.11	2.31
④	20代	122	2.16	1.055	.096	1.97	2.35
	30代	119	2.00	.957	.088	1.83	2.17
	40代	93	1.89	1.037	.108	1.68	2.11
	50代	161	1.84	.948	.075	1.69	1.99
	合計	495	1.97	.999	.045	1.88	2.06
⑤	20代	121	2.87	.991	.090	2.69	3.05
	30代	119	2.80	.988	.091	2.62	2.98
	40代	93	2.75	.985	.102	2.55	2.96
	50代	162	2.48	1.004	.079	2.32	2.63
	合計	495	2.70	1.004	.045	2.61	2.79
⑥	20代	122	2.98	1.004	.091	2.80	3.16
	30代	119	3.08	.913	.084	2.91	3.24
	40代	94	3.17	.946	.098	2.98	3.36
	50代	162	3.10	.963	.076	2.96	3.25
	合計	497	3.08	.958	.043	3.00	3.16
⑦	20代	122	2.03	.871	.079	1.88	2.19
	30代	119	2.28	.991	.091	2.10	2.46
	40代	94	2.67	.897	.092	2.49	2.85
	50代	163	2.45	.957	.075	2.30	2.60
	合計	498	2.35	.957	.043	2.26	2.43
⑧	20代	122	1.83	.724	.066	1.70	1.96
	30代	118	2.42	.841	.077	2.27	2.58
	40代	93	2.59	.797	.083	2.43	2.76
	50代	163	2.69	.828	.065	2.56	2.82
	合計	496	2.40	.868	.039	2.32	2.47
⑨	20代	122	1.98	.782	.071	1.84	2.12
	30代	118	2.33	.868	.080	2.17	2.49
	40代	93	2.70	.749	.078	2.54	2.85
	50代	163	2.66	.849	.066	2.53	2.79
	合計	496	2.42	.866	.039	2.35	2.50
⑩	20代	122	3.44	.761	.069	3.31	3.58
	30代	118	3.47	.759	.070	3.33	3.60
	40代	93	3.51	.701	.073	3.36	3.65
	50代	163	3.80	4.149	.325	3.16	4.44
	合計	496	3.58	2.455	.110	3.36	3.79

表6 問11各項目の分散分析結果

		平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
①	グループ間	1.418	3	.473	.632	.595
	グループ内	369.748	494	.748		
	合計	371.167	497			
②	グループ間	8.311	3	2.770	3.375	.018
	グループ内	403.810	492	.821		
	合計	412.121	495			
③	グループ間	18.474	3	6.158	4.953	.002
	グループ内	612.918	493	1.243		
	合計	631.392	496			
④	グループ間	8.036	3	2.679	2.709	.045
	グループ内	485.447	491	.989		
	合計	493.483	494			
⑤	グループ間	12.992	3	4.331	4.387	.005
	グループ内	484.757	491	.987		
	合計	497.749	494			
⑥	グループ間	2.001	3	.667	.726	.537
	グループ内	452.779	493	.918		
	合計	454.781	496			
⑦	グループ間	24.101	3	8.034	9.212	.000
	グループ内	430.801	494	.872		
	合計	454.902	497			
⑧	グループ間	56.834	3	18.945	29.523	.000
	グループ内	315.715	492	.642		
	合計	372.548	495			
⑨	グループ間	40.525	3	13.508	20.115	.000
	グループ内	330.408	492	.672		
	合計	370.933	495			
⑩	グループ間	12.060	3	4.020	.666	.573
	グループ内	2971.029	492	6.039		
	合計	2983.089	495			

(f) 問 12 については、表 7 のように周囲の人間関係に対する満足度が示され、分散分析結果は表 8 のようになった。いずれも有意差が見られ、Duncan の多範囲検定 ($p<.05$) を行った。友達関係に満足しているのは 20 代 > 30 代 > 50 代、親との関係に満足しているのは 20・30・40 代 > 50 代、パートナーとの関係に満足しているのも 20・30・40 代 > 50 代であった。人間関係の満足度は 20 代が総じて高く、50 代は全般に不満を感じている。

表 7 問 12 周囲との人間関係の統計値

		度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間	
						下限	上限
①	20代	121	1.51	.607	.055	1.40	1.62
	30代	118	1.74	.697	.064	1.61	1.86
	40代	93	1.84	.696	.072	1.70	1.98
	50代	162	1.95	.658	.052	1.85	2.05
	合計	494	1.77	.682	.031	1.71	1.83
②	20代	122	1.60	.757	.069	1.46	1.73
	30代	117	1.85	.897	.083	1.68	2.01
	40代	93	1.87	.969	.101	1.67	2.07
	50代	163	2.81	1.443	.113	2.59	3.03
	合計	495	2.11	1.200	.054	2.00	2.21
③	20代	121	2.75	1.724	.157	2.44	3.06
	30代	115	2.37	1.608	.150	2.08	2.67
	40代	91	2.12	1.298	.136	1.85	2.39
	50代	163	2.42	1.374	.108	2.20	2.63
	合計	490	2.43	1.520	.069	2.30	2.57

表 8 問 12 の各項目の分散分析結果

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
①	グループ間	13.879	3	4.626	10.530	.000
	グループ内	215.273	490	.439		
	合計	229.152	493			
②	グループ間	125.219	3	41.740	34.967	.000
	グループ内	586.106	491	1.194		
	合計	711.325	494			
③	グループ間	21.624	3	7.208	3.159	.024
	グループ内	1108.786	486	2.281		
	合計	1130.410	489			

(g) 問 13 の①～⑬の統計値を表 9 に、一元配置分散分析結果を表 10 に示す。有意差が見られたのは③⑩の 2 項目で、Duncan の多範囲検定 ($p<.05$) を行った。その結果、③自分から率先して行動できるのは 50 代 > 20 代で、⑩見通し立てて計画的に仕事を進められるのは 50・40 代 > 30・20 代であることが示された。教師としての力量は、経験と共に自己有用感の高さとして表れるといえる。

(h) 問 14 の①～⑨の統計値を表 11 に、一元配置分散分析結果を表 12 に示す。有意差または差のある傾向が見られたのは①③⑥⑨の 4 項目で、Duncan の多範囲検定 ($p<.05$) を行った。その結果、①仕事が楽しいと感じているのは 20・30 代 > 50 代で、③仕事を通じて能力が高まっていると思えるのは 20 代 > 30 代であり、また⑥上司や先輩を尊敬できるのは 20 代 > 30・40・50 代で、⑨仕事量が多くて大変と思っているのは 30 代 > 50 代となった。教職の仕事への充実感は 20・30 代が感じているが、30 代は仕事の多さも実感している。

(i) 問 15 の①～⑫の統計値を表 13 に、一元配置分散分析結果を表 14 に示す。有意差または差のある傾向が見られたのは①③④⑩⑪⑫の 6 項目で、Duncan の多範囲検定 ($p<.05$) を行った。その結果、①読書をしたのは 50 代 > 40 代 > 20・30 代、③家事手伝いをした（傾向）のは 40・50 代 > 20 代 > 30 代、④家で勉強したのは 40・50 代 > 30・20 代、⑩部活に熱心だったのは 20 代 > 40・30・50 代、⑪テレビゲームをしたのは 30・20 代 > 40 代 > 50 代、⑫親や大人に反抗したのは 30・40・20 代 > 50 代となった。若い世代ほど部活やゲームを多くし、ベテランほど堅実な小中時代が推測される。

(j) 問 16 の統計値を表 15 に、一元配置分散分析結果を表 16 に示す。Duncan の多範囲検定 ($p<.05$) を行った結果、小中の経済状況でゆとりがあったのは 20・30・40 代 > 50 代であった。

表 9 問 13 の各項目の統計値

		度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間	
						下限	上限
①	20代	122	2.37	.592	.054	2.26	2.47
	30代	117	2.20	.605	.056	2.09	2.31
	40代	94	2.24	.581	.060	2.13	2.36
	50代	160	2.25	.604	.048	2.16	2.34
	合計	493	2.27	.598	.027	2.21	2.32
②	20代	122	2.14	.672	.061	2.02	2.26
	30代	118	2.16	.666	.061	2.04	2.28
	40代	94	2.15	.586	.060	2.03	2.27
	50代	160	2.05	.570	.045	1.96	2.14
	合計	494	2.12	.623	.028	2.06	2.17
③	20代	122	2.35	.703	.064	2.23	2.48
	30代	118	2.30	.604	.056	2.19	2.41
	40代	94	2.21	.620	.064	2.09	2.34
	50代	160	2.14	.623	.049	2.05	2.24
	合計	494	2.24	.642	.029	2.19	2.30
④	20代	122	1.96	.504	.046	1.87	2.05
	30代	118	2.03	.569	.052	1.93	2.14
	40代	94	2.02	.463	.048	1.93	2.12
	50代	160	1.96	.560	.044	1.88	2.05
	合計	494	1.99	.531	.024	1.94	2.04
⑤	20代	122	2.34	.613	.056	2.23	2.45
	30代	115	2.35	.714	.067	2.22	2.48
	40代	93	2.43	.649	.067	2.30	2.56
	50代	160	2.33	.669	.053	2.22	2.43
	合計	490	2.36	.662	.030	2.30	2.41
⑥	20代	122	2.35	.655	.059	2.24	2.47
	30代	117	2.28	.729	.067	2.15	2.42
	40代	94	2.21	.546	.056	2.10	2.32
	50代	160	2.18	.556	.044	2.09	2.26
	合計	493	2.25	.626	.028	2.20	2.31
⑦	20代	122	2.82	.704	.064	2.69	2.95
	30代	117	2.63	.772	.071	2.49	2.77
	40代	94	2.93	3.190	.329	2.27	3.58
	50代	159	2.55	.709	.056	2.44	2.66
	合計	492	2.71	1.541	.069	2.57	2.84
⑧	20代	122	2.58	.737	.067	2.45	2.71
	30代	117	2.41	.733	.068	2.28	2.54
	40代	94	2.45	.598	.062	2.32	2.57
	50代	159	2.50	.728	.058	2.38	2.61
	合計	492	2.49	.709	.032	2.42	2.55
⑨	20代	122	2.66	.713	.065	2.53	2.78
	30代	117	2.56	.712	.066	2.43	2.69
	40代	94	2.62	.510	.053	2.51	2.72
	50代	160	2.54	.743	.059	2.43	2.66
	合計	493	2.59	.689	.031	2.53	2.65
⑩	20代	121	2.44	.752	.068	2.30	2.57
	30代	117	2.37	.772	.071	2.23	2.51
	40代	94	2.17	.666	.069	2.03	2.31
	50代	160	2.17	.617	.049	2.07	2.27
	合計	492	2.28	.707	.032	2.22	2.35
⑪	20代	122	2.16	.589	.053	2.05	2.26
	30代	117	2.17	.562	.052	2.07	2.27
	40代	94	2.12	.526	.054	2.01	2.22
	50代	160	2.10	.540	.043	2.02	2.18
	合計	493	2.13	.554	.025	2.08	2.18
⑫	20代	122	2.27	.681	.062	2.15	2.39
	30代	117	2.39	.643	.059	2.28	2.51
	40代	94	2.43	.595	.061	2.30	2.55
	50代	160	2.56	2.426	.192	2.18	2.93
	合計	493	2.42	1.480	.067	2.29	2.55
⑬	20代	122	1.99	.506	.046	1.90	2.08
	30代	117	1.97	.601	.056	1.86	2.08
	40代	94	1.93	.446	.046	1.83	2.02
	50代	160	1.86	.508	.040	1.78	1.94
	合計	493	1.93	.521	.023	1.88	1.98

表 10 問 13 各項目の分散分析結果

表10 問13各項目の分散分析結果						
		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
①	グループ間	1.938	3	.646	1.813	.144
	グループ内	174.253	489	.356		
	合計	176.191	492			
②	グループ間	1.104	3	.368	.948	.417
	グループ内	190.087	490	.388		
	合計	191.190	493			
③	グループ間	3.461	3	1.154	2.828	.038
	グループ内	199.901	490	.408		
	合計	203.362	493			
④	グループ間	.557	3	.186	.658	.578
	グループ内	138.392	490	.282		
	合計	138.949	493			
⑤	グループ間	.689	3	.230	.522	.667
	グループ内	213.524	486	.439		
	合計	214.212	489			
⑥	グループ間	2.430	3	.810	2.081	.102
	グループ内	190.381	489	.389		
	合計	192.811	492			
⑦	グループ間	10.749	3	3.583	1.514	.210
	グループ内	1155.104	488	2.367		
	合計	1165.854	491			
⑧	グループ間	1.956	3	.652	1.299	.274
	グループ内	244.970	488	.502		
	合計	246.927	491			
⑨	グループ間	1.017	3	.339	.714	.544
	グループ内	232.217	489	.475		
	合計	233.233	492			
⑩	グループ間	7.028	3	2.343	4.789	.003
	グループ内	238.702	488	.489		
	合計	245.730	491			
⑪	グループ間	.429	3	.143	.464	.707
	グループ内	150.735	489	.308		
	合計	151.164	492			
⑫	グループ間	5.783	3	1.928	.879	.452
	グループ内	1072.461	489	2.193		
	合計	1078.243	492			
⑬	グループ間	1.346	3	.449	1.659	.175
	グループ内	132.309	489	.271		
	合計	133.655	492			

表 11 問 14 の各項目の統計値

		度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間	
						下限	上限
①	20代	122	1.98	.655	.059	1.87	2.10
	30代	117	2.03	.629	.058	1.92	2.15
	40代	94	2.10	.569	.059	1.98	2.21
	50代	160	2.23	.684	.054	2.12	2.34
	合計	493	2.10	.649	.029	2.04	2.15
②	20代	121	2.94	.809	.074	2.80	3.09
	30代	117	2.94	.833	.077	2.79	3.09
	40代	94	2.86	.850	.088	2.69	3.04
	50代	159	2.79	.796	.063	2.67	2.92
	合計	491	2.88	.819	.037	2.81	2.95
③	20代	122	2.03	.692	.063	1.91	2.16
	30代	117	2.27	1.005	.093	2.09	2.46
	40代	94	2.18	.622	.064	2.05	2.31
	50代	160	2.22	.631	.050	2.12	2.32
	合計	493	2.18	.752	.034	2.11	2.25
④	20代	122	2.38	.753	.068	2.24	2.51
	30代	117	2.38	.668	.062	2.26	2.51
	40代	94	2.41	.663	.068	2.28	2.55
	50代	160	2.46	.690	.055	2.35	2.57
	合計	493	2.41	.695	.031	2.35	2.48
⑤	20代	122	1.89	1.957	.177	1.54	2.24
	30代	119	1.85	.684	.063	1.72	1.97
	40代	94	1.95	.611	.063	1.82	2.07
	50代	160	1.97	.598	.047	1.88	2.06
	合計	495	1.92	1.113	.050	1.82	2.02
⑥	20代	122	1.586	.6824	.0618	1.464	1.708
	30代	119	1.882	.6131	.0562	1.771	1.994
	40代	94	1.894	.5768	.0595	1.775	2.012
	50代	160	2.044	.6279	.0496	1.946	2.142
	合計	495	1.864	.6505	.0292	1.806	1.921
⑦	20代	122	2.09	.656	.059	1.97	2.21
	30代	119	2.10	.643	.059	1.98	2.22
	40代	94	2.09	.561	.058	1.97	2.20
	50代	160	2.04	.633	.050	1.94	2.14
	合計	495	2.07	.627	.028	2.02	2.13
⑧	20代	122	2.95	.917	.083	2.79	3.12
	30代	119	2.97	.873	.080	2.81	3.12
	40代	94	2.88	.788	.081	2.72	3.04
	50代	161	2.93	.721	.057	2.81	3.04
	合計	496	2.93	.820	.037	2.86	3.01
⑨	20代	122	1.92	.799	.072	1.77	2.06
	30代	118	1.78	.741	.068	1.64	1.91
	40代	94	1.86	.666	.069	1.73	2.00
	50代	159	2.01	.751	.060	1.89	2.12
	合計	493	1.90	.748	.034	1.84	1.97

表 12 問 14 各項目の分散分析結果

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
①	グループ間	4.914	3	1.638	3.957	.008
	グループ内	202.413	489	.414		
	合計	207.327	492			
②	グループ間	2.139	3	.713	1.063	.364
	グループ内	326.529	487	.670		
	合計	328.668	490			
③	グループ間	3.906	3	1.302	2.320	.075
	グループ内	274.386	489	.561		
	合計	278.292	492			
④	グループ間	.644	3	.215	.443	.722
	グループ内	236.942	489	.485		
	合計	237.586	492			
⑤	グループ間	1.134	3	.378	.304	.822
	グループ内	610.470	491	1.243		
	合計	611.604	494			
⑥	グループ間	14.716	3	4.905	12.394	.000
	グループ内	194.329	491	.396		
	合計	209.045	494			
⑦	グループ間	.342	3	.114	.289	.834
	グループ内	193.892	491	.395		
	合計	194.234	494			
⑧	グループ間	.416	3	.139	.205	.893
	グループ内	332.389	492	.676		
	合計	332.804	495			
⑨	グループ間	3.679	3	1.226	2.208	.086
	グループ内	271.647	489	.556		
	合計	275.327	492			

表 13 問 15 の各項目の統計値

			度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間	
							下限	上限
①	20代	122	2.40	1.058	.096	2.21	2.59	
	30代	119	2.38	1.097	.101	2.18	2.58	
	40代	94	2.10	1.006	.104	1.89	2.30	
	50代	162	1.96	.935	.073	1.81	2.10	
	合計	497	2.19	1.035	.046	2.10	2.28	
②	20代	122	2.43	.909	.082	2.27	2.60	
	30代	119	2.57	.869	.080	2.41	2.73	
	40代	94	2.43	.783	.081	2.27	2.59	
	50代	162	2.59	.744	.058	2.48	2.71	
	合計	497	2.52	.826	.037	2.44	2.59	
③	20代	122	2.12	.868	.079	1.97	2.28	
	30代	119	2.27	.789	.072	2.13	2.41	
	40代	94	2.00	.790	.081	1.84	2.16	
	50代	162	2.04	.775	.061	1.92	2.16	
	合計	497	2.11	.808	.036	2.04	2.18	
④	20代	122	1.93	.831	.075	1.79	2.08	
	30代	119	1.88	.865	.079	1.73	2.04	
	40代	94	1.65	.683	.070	1.51	1.79	
	50代	162	1.72	.743	.058	1.60	1.83	
	合計	497	1.80	.791	.035	1.73	1.87	
⑤	20代	122	1.94	.973	.088	1.77	2.12	
	30代	119	1.86	.895	.082	1.69	2.02	
	40代	94	1.81	.859	.089	1.63	1.98	
	50代	161	1.73	.748	.059	1.62	1.85	
	合計	496	1.83	.865	.039	1.75	1.90	
⑥	20代	122	1.73	.824	.075	1.58	1.88	
	30代	119	1.89	.745	.068	1.76	2.03	
	40代	94	1.79	.788	.081	1.63	1.95	
	50代	161	1.79	.825	.065	1.66	1.92	
	合計	496	1.80	.799	.036	1.73	1.87	
⑦	20代	122	1.79	.835	.076	1.64	1.94	
	30代	119	1.83	.774	.071	1.69	1.97	
	40代	94	1.74	.687	.071	1.60	1.89	
	50代	160	1.83	.789	.062	1.70	1.95	
	合計	495	1.80	.777	.035	1.73	1.87	
⑧	20代	122	2.38	.912	.083	2.21	2.54	
	30代	119	2.29	.847	.078	2.14	2.45	
	40代	94	2.28	.795	.082	2.11	2.44	
	50代	161	2.36	.763	.060	2.24	2.48	
	合計	496	2.33	.826	.037	2.26	2.41	
⑨	20代	121	2.13	.939	.085	1.96	2.30	
	30代	119	2.00	.792	.073	1.86	2.14	
	40代	94	1.85	.761	.079	1.70	2.01	
	50代	160	1.98	.824	.065	1.85	2.10	
	合計	494	2.00	.838	.038	1.92	2.07	
⑩	20代	122	1.37	.741	.067	1.24	1.50	
	30代	119	1.62	.834	.076	1.47	1.77	
	40代	94	1.55	.825	.085	1.38	1.72	
	50代	160	1.69	.890	.070	1.55	1.83	
	合計	495	1.57	.836	.038	1.50	1.64	
⑪	20代	120	2.36	1.106	.101	2.16	2.56	
	30代	119	2.40	.968	.089	2.23	2.58	
	40代	94	3.14	1.022	.105	2.93	3.35	
	50代	161	3.68	.676	.053	3.57	3.78	
	合計	494	2.95	1.096	.049	2.85	3.04	
⑫	20代	122	2.35	.822	.074	2.21	2.50	
	30代	119	2.28	.791	.073	2.13	2.42	
	40代	94	2.34	.784	.081	2.18	2.50	
	50代	161	2.73	.733	.058	2.61	2.84	
	合計	496	2.45	.800	.036	2.38	2.52	

表 14 問 15 各項目の分散分析結果

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
①	グループ間	19.318	3	6.439	6.199	.000
	グループ内	512.139	493	1.039		
	合計	531.457	496			
②	グループ間	2.897	3	.966	1.420	.236
	グループ内	335.208	493	.680		
	合計	338.105	496			
③	グループ間	4.885	3	1.628	2.514	.058
	グループ内	319.248	493	.648		
	合計	324.133	496			
④	グループ間	6.293	3	2.098	3.400	.018
	グループ内	304.182	493	.617		
	合計	310.475	496			
⑤	グループ間	3.195	3	1.065	1.427	.234
	グループ内	367.239	492	.746		
	合計	370.433	495			
⑥	グループ間	1.621	3	.540	.846	.469
	グループ内	314.218	492	.639		
	合計	315.839	495			
⑦	グループ間	.528	3	.176	.290	.833
	グループ内	298.070	491	.607		
	合計	298.598	494			
⑧	グループ間	.835	3	.278	.406	.749
	グループ内	337.276	492	.686		
	合計	338.111	495			
⑨	グループ間	4.293	3	1.431	2.052	.106
	グループ内	341.699	490	.697		
	合計	345.992	493			
⑩	グループ間	7.733	3	2.578	3.749	.011
	グループ内	337.613	491	.688		
	合計	345.345	494			
⑪	グループ間	165.994	3	55.331	63.549	.000
	グループ内	426.637	490	.871		
	合計	592.632	493			
⑫	グループ間	18.159	3	6.053	9.968	.000
	グループ内	298.775	492	.607		
	合計	316.933	495			

表 15 問 16 の統計値

		度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間	
						下限	上限
16	20代	122	2.52	1.115	.101	2.32	2.72
	30代	118	2.54	.834	.077	2.39	2.69
	40代	94	2.70	1.035	.107	2.49	2.91
	50代	162	3.03	.881	.069	2.89	3.17
	合計	496	2.73	.985	.044	2.64	2.81

表 16 問 16 の分散分析結果

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
15	グループ間	24.449	3	8.150	8.788	.000
	グループ内	456.261	492	.927		
	合計	480.710	495			

4. 考察

「1. 問題の所在」で述べた通り、筆者らは、若手教員と経験のある教員との間に、生活意識と生活様態、および成長期の経験に差があるのではないかと仮説のもとに、本アンケート調査を実施した。より具体的に述べれば、経験のある教員と比較して、若手教員には生活経験のある種の「貧困化」が生じているのではないかという仮説を持っていた。なぜなら、そのような仮説が、筆者らの研究（片山・角田・小松，2017）で示された教職経験5年以上と5年未満の教員の間の認識の大きなギャップを説明することができるように思われたからである。

しかしながら、筆者らの予想とは異なり、「3. 調査結果」に示した分析結果のように、社会におけるデジタル情報機器の普及に伴う変化から当然予想される世代間の差異を除いては、必ずしも仮説を裏付ける結果は得られなかった。先ほども述べたように、本調査の仮説の一部には、若手教員は熟練教員に比べて、生活のあり方全体が「貧困化」しているのではないかというものがあったが、今回の結果はむしろ、若手教員の方が相対的に現在の仕事と生活に満足感を抱いていることを示唆するものであった。この結果を、どのように理解することができるか、以下にいくつかの点から考察を行う。

若手教員の生活のあり方が「貧困化」しているのではないかという仮説を支持する結果が得られなかった理由として考えられるのは、アンケート調査という方法の限界である。アンケート調査は回答者の意識のあり方を問うものであり、回答者自身が意識していなかったり、自覚していなかったりすることは、回答結果に反映されにくい。本調査の仮説の「生活のあり方全体の『貧困化』」とは、単に経済的なゆとりのなさを意味するものではなく、時間的なゆとりのなさ、気持ちのゆとりのなさ、対人的経験や社会的経験の平板化といった事態を想定してのものであった。しかし、こうした「ゆとりのなさ」や「平板化」は、比較の基準となる「ゆとり」や「豊かさ」の経験があってはじめて意識にのぼり、自覚されるものであると考えられる。例えば、いささか粗雑な単純化であるとのそしりを免れないかもしれないが、日本が経済的な豊かさのピークを迎えつつあった1980年代前半にはすでに児童期を迎えていた、1975年頃以前に生まれた世代と、児童期を迎えた頃にはバブル経済崩壊以後の経済的な停滞期に入っていた、1985年頃以降に生まれた世代とでは、それぞれの当時の社会における平均的な生活様式のあり方の違いから、「ゆとり」や「豊かさ」に関する経験的な判断基準が

異なっている可能性があるだろう。

以下に述べる考察は、今回の調査結果に「現れたもの」の分析から直接的に導かれる解釈ではなく、今回の調査結果が仮説を支持するものでなかった理由を推論することを手掛かりとして、今回の調査結果に「現れなかったもの」についての新たな仮説を展開したものである。

もし上に述べたような想定に、ある程度の妥当性があるとすれば、ある世代の人々には、「多忙化」や「貧困化」や「自己疎外」として意識されて眼に映るものが、他の世代の人々には比較的に慣れた当たり前の光景として映っているのかもしれない。人は、自分にとって馴染みのある当たり前のものとして感じられるものに対しては、そもそも違和感を持つことが少ない。ましてや、自分にとって馴染みのある当たり前のものとして感じられるものに対して、そこに何らかの問題の所在を感知することは、ありそうにないように思われる。例えば、近年、働き方の「ブラック化」という言説が社会の中に浸透しているが、学校教員に限らず、若い働き手は、「ブラック化」なるものの実態に対しての実感が、他の世代の働き手と比較して、相対的に薄い可能性も考えられる。

もし、若手教員の比較的多くが、彼ら自身のことをめぐってそうした感受性を持っているとするなら、学校をめぐって私たちの眼前に広がる光景に対して、若手教員と経験のある教員との間には、かなり異なった受け止め方があることが想定される。そして、そうした背景のもとに様々な形で顕在化する認識のギャップは、思いの外大きいかもしれない。このことは、学校が児童生徒の健全な育みに取り組む中で、何を重要な課題とみなし、何をそれぞれの教員が自分の身につけるべき力として思い描くかをめぐっても、問題をはらんだ状況を生んでいるかもしれない。

例えば、「子どもたちに寄り添う」であるとか、「保護者の思いを受け止める」といったことが、その言葉の表面的な意味は若手教員と熟練教員との間で共有できても、その実質的な意味と意義と実践のあり方に関しては、単に経験の厚みの違いに由来する以上に、共通の理解と認識を持つことが実際には困難になっているかもしれない。このような状況があるとすれば、本論文の冒頭にも述べた、「教職員のチーム化」には憂慮すべき課題があると言わねばならないだろう。

私たちは、「現れている」ものは見ることができても、「現れていないもの」を見ることは難しい。目の前に現れていないもの、目の前では生じることがないものを「見る」ためには、「生じうる可能性があるのに実現していない何ものか」に対する想像力が不可欠である。しかし、そうした想像力を成長の過程の中で獲得することは、現代社会においてはさまざまな要因から難しくなっていると思われる。土井隆義（2016）は、現在の多くの子どもたちが生きていられると考えられる「生活圏が内閉化した日常世界」では、実はその日常世界の外には努力すれば報われる機会があるにもかかわらず、その機会が剥奪されていることが自覚されにくい状況があることを指摘して、「剥奪感をも剥奪されている」という意味で、ここには剥奪の二重化が生じている」と述べている。

このような土井の指摘に倣えば、子どもたちにとって、自分たちが剥奪的な状況に置かれていることを感受する感性そのものの育みが損なわれているあり方を、「剥奪感の剥奪」と呼ぶこともあながち不適切ではないだろう。子どもたちばかりでなく、同様の事態は比較的に若い世代の大人たちにも当てはまると言えるかもしれない。情報通信機器を活用する力に長け、有り余るほどの情報の海を泳ぐことができることは、それと引き換えに、今自分の目の前に現れていない何ものかを剥奪され、何ものかから疎外されているかもしれないという感受性を育むことと、ある種のトレードオフの関係になるのかもしれない。

さまざまな福祉的課題を含む、子どもたちが教育を受ける過程で生じている困難な問題に取り組ん

でいくうえで、学校内の教職員間の丁寧な対話的コミュニケーションが、これまで以上に必要不可欠であるように思われる。そのような状況の中で、若手教員と熟練教員とのギャップは、どのように作用する可能性があるだろうか。

若手教員は、現在の子どもたちや若い親世代が当たり前呼吸しているのと同じ空気の中にいるのかもしれない。そこでは、子どもたちや若い親世代の「当り前の」日常的なあり方に、違和感を持つことは少なく、ましてやそれを問題と覚えることは少ないかもしれない。そこに注意を促す経験のある教員に対しては、「考え方が古い」と、内心で一蹴する態度をとるかもしれない。しかし、その「当り前」の日常の中で、どんな可能性が見失われているのかについては、先にも触れたように、十分に想像し考える機会をあまり持ってこなかったかもしれない。例えば、表面的に対人関係が「問題のない」「平穩な」ものに見えることが、葛藤への取り組みを経て相互に成長していく機会を奪う可能性には鈍感であるかもしれない。それ以前に、「葛藤」がどういうものか、言葉の定義以上の実感を持って理解することが、すでにひどく困難であるかもしれない。

一方、経験のある教員は、一定の裏づけのある実践力を持ち、大局的な判断力や文脈を読む力に長けているかもしれないが、自分自身の経験が災いして、他方で目の前で実際に起きていることを、ありのままに受け取ることはできずにいるかもしれない。例えば、今、自分の目の前で何が起きているのか、そこに子どもたちや保護者の気持ちはどのように動いているのか、あるいは動けずにいるのかに積極的な関心を寄せることができず、あるべき「正しい姿」を目指して自らの指導力を発揮してしまうかもしれない。自分が経験してきたこととは異なる現状に対して、そうした状況の変化に対して、心を開いておくことができず、本当のところよくわからない状況を、自分の経験で理解できるものに「回収」してしまうかもしれない。若手教員とはまた異なる意味で、そこに「現れていないもの」を見ることができないかもしれない。

こうした異質な経験のあり方を持つ者同士が、そしてそれぞれに、自分の経験と理解に閉じこもらずに他者と対話していくことに固有の困難さを抱えがちな者同士が、そうした相互のあり方と違いを理解しようと努めながら、子どもたちを目の前にしつつ、その保護者たちに思いを寄せつつ、互いに学び合う関係を築き上げていくことが、現在の学校に求められている喫緊の課題ではないだろうか。

5. 結語

筆者らは、若手教員と経験のある教員との間に、生活意識と生活様態、および成長期の経験に差があるのではないかという仮説のもとに、本アンケート調査を実施した。しかしながら、予想とは異なり、一部を除いて仮説を裏付ける結果は得られなかった。すなわち、若手教員は経験のある教員に比べて、生活のあり方全体が「貧困化」しているのではないかと仮説を立てたわけであるが、結果はむしろ若手教員の方が相対的に現在の仕事と生活に満足感を抱いており、若手教員は何ら困り感を感じていなかったのである。

筆者らはこれについて、アンケート調査による限界を認めた上で、若手教員に自分たちが剥奪的な状況に置かれていることを感受する感性そのものの育みが損なわれているのではないかと、一方で経験のある教員は自分自身の経験が災いして、今、目の前で実際に起きていることを、ありのままに受け取ることはできずにいるのではないかと、新たな仮説を立てるに至った。すなわち、若手教員と経験

のある教員の間にある認識の違いは、両者の間にある「感受性そのものの違い」に起因するのではないかと推考したわけである。この「感受性そのものの違い」が、「チームとしての学校」の阻害要因となっている可能性があり、これまで見逃されてきた視点だといえる。

こうした教職員間にある感受性の違いをうめるためには、対話がきわめて重要であり、それを抜きにして「チームとしての学校」が実現されることはない。本稿で検証したことをふまえれば、その対話は表層的なものでは意味をなさず、眼前にあるものの背後や言葉の裏にあるものを読み取り、歩み寄ろうとする、一層丁寧な対話が求められていることになる。

付記

本稿は、JSPS 科研費 15k04227「生徒指導の福祉的課題（貧困・虐待等）に関する研究」（代表：片山紀子）による研究成果の一部である。

引用文献

- ・片山紀子・角田豊・小松貴弘（2017）「チーム学校に向けた現代的課題 - 生徒指導的観点から -」『京都教育大学紀要』京都教育大学，第 130 号，pp. 35-47。
- ・片山紀子・角田豊・小松貴弘（2018）「チーム学校に向けた現代的課題（2） - 生徒指導的観点から -」『京都教育大学紀要』京都教育大学，第 131 号，pp. 33-46。
- ・土井隆義（2016）「ネット・メディアと仲間関係」佐藤学・秋田喜代美・志水宏吉・小玉重夫・北村友人編『岩波講座 教育 変革への展望 3 変容する子どもの関係』岩波書店，p. 126。
- ・ベネッセ教育総合研究所（2006）「若者の仕事生活実態調査報告書 - 25 ～ 35 歳の男女を対象に - [2006 年]」 <https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=3175>